

ボールゲーム E の授業評価・授業研究報告書

保健体育講座・福田 隆

1-1 授業の概観

本授業（ボールゲーム E）は、1年・2年の後学期に開講する科目であり、授業の特性上から男子と女子を区分し、それぞれを各年開講としている。また、保健体育専修・スポーツ健康科学課程の必修科目である。今年度は、男子のクラスとなり、受講学生数は、38名であった。本授業は、バレーボール（福田）とハンドボール（堺）の種目で構成されを2名の教員が分担し授業を行った。この報告書は、福田が担当したバレーボールを中心にまとめたものである。

1-2 授業の目的

授業の目的は、バレーボールとハンドボールの指導者として必要な基本的な知識と指導法を学習する。また、ボールゲームの基本動作をデモンストレーションできるように必要な能力を養成する。さらに、応用的技術として、各種フォーメーションやルールを理解し、審判方法やゲームの運営法を学習することである。

1-3 授業の到達目標

1) (知識・思考)

バレーボールにおける基本的な知識を正しく理解し、論理的に説明できる。指導対象者に合わせた指導の在り方と指導技術について理解する。

2) (技能・表現)

子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。技術的に高レベルのパフォーマンスを行うことができる。

3) (意欲・関心・態度)

スポーツにおける技術を科学的側面から観察することができる。スポーツの未熟練者に適切な指導ができる。

1-4 授業の概要

授業は、実技練習が中心となるが、方法論や理論的な説明も多く取り入れた。個人の技術向上をねらうが、学生が相互に指導者と生徒の立場に別れ、お互いに指導しあうことにより、指導能力と各個人の技能の向上を目指した。実技の内容は以

下のとおりである。ウォーミングアップ、指導補助技術(ボールの投げ方等)、基本姿勢、アンダーハンドパス、オーバーハンドパス、ミート、アタック、ブロック、サーブ、レシーブ等である。

2 授業評価法

授業の評価は、基本技術・審判方法・指導方法に関する実技試験による技能向上度と理解度の結果を分析した。また、レポートおよびアンケートの結果によって行った。学生アンケートの形態は、自由記述型のものとして幅広く学生の評価を得ることを目的とした。

3 授業評価結果

受講生は38名であり、技術練習やゲームを行うに当たっても適した状況で開講できた。体育館もバレーボールコート2面が占有でき、指導環境としては、最適であった。課題であったバレーボールコートの設営に要する時間の短縮については、バレーボール部員が指導的な立場となり、受講者が協力して手際よく授業の準備にあたってくれた。これらの作業は、授業を効率よく行うためだけでなく、学生が指導者になった時には、欠かすことができない知識の一つになるであろう。

授業の回数が7回しかなく、この中で知識的な部分での理解度の向上は、かなり改善できた。しかし、技能習得のために、授業時間外の復習や練習が必要であることを学生に伝えていたが、目標としていた水準には達成できなかったと思える。

知識・理解度を確認するためにレポートの作成を求めた。しかし、授業中に説明した指導ポイントの多くが、忘れ去られていたことが明らかとなった。実技中心の授業であるが、必要事項を整理したプリントの配布や、授業中においてノートに記入できるような工夫をしていきたい。

学生の意識として、自分が知識・技能獲得をするとゲームを楽しみたくなる欲求が高まる。しかし、上手くできない生徒に適切な指導ができるかが本来の目的であることから、指導する場面設定を工夫する等の授業計画を再検討していきたい。

総合型地域スポーツクラブ指導実習Ⅰの授業評価・授業研究報告書

保健体育講座・福田 隆

1-1 授業の概観

本授業は、1年前・後期に集中講義形式で開講する科目であり、スポーツ健康科学課程の必修科目である。また、保健体育専修の学生も選択科目として受講し、受講学生数は、32名であった。

1-2 授業の目的

本授業では、総合型スポーツクラブにおける各スポーツ教室に参加し、運動指導教室開催に向けてのプロセスを学び、その運営方法などについて観察し、理解する。また、体力の改善を図るための運動プログラム作成に必要な基礎的事柄に対する理解を深める。さらに運動プログラムを実践するにあたっての基礎的知識を学ぶ。

1-3 授業の到達目標

1) (知識・思考)

運動指導教室の企画・立案、運営の仕方を説明することができる。運動プログラム作成にあたっての基礎的知識を説明することができる。

2) (技能・表現)

各スポーツ教室実施の準備ができる。安全な実技指導ができる。

3) (意欲・関心・態度)

参加者の意欲・関心を高めることができる。他の教室運営と比較することができる。スポーツの未熟練者に適切な指導ができる

1-4 授業の概要

本実習では、観察を通して運動指導教室の企画・立案、運営の方法について実習を通じて学んでいく。また指導対象者への対応や運動指導プログラムの作成の仕方について説明を行う。

2 授業評価法

授業の評価は、中間と最終回に実習の活動報告会を実施し、このときのディスカッションにおいてでた意見から分析を行った。また、活動報告書に、随時感想の記入をもとめた。最終回にアンケートを行い授業評価の基礎資料とした。

3 授業評価結果

(1) 各スポーツ教室・クラブごとに、参加者の

特性が大きく異なっていた。大別すると、小学生を対象としたスポーツ教室と一般成人を対象とした教室に分類される。

活動報告の結果から、学生にとっても、大学に入ってから初めての实習であるために、とまどいが多く見られた。そこで、前半部分では、観察実習的な要素を強調して実施した。事前指導として基本的な指導ポイントの解説を行ったが、対象者の年齢幅が大きいため、指導における時間が不足した状態で始めざるを得なかった。

(2) 各自の活動している活動報告の結果、それぞれの教室の問題点や優れているポイントを具体的に分析できていた。

(3) 他教室の視察に関する報告においては、担当を指定しなかったために、特定の教室に固まってしまう点については、来年度以降の課題としたい。報告書の内用としては、各自の所属する教室との比較検討が適切になされ、今後の教室運営に大きく貢献できるものと思われる。しかし、即時的な問題解決を必要とされるものや、対応が可能な課題に対して、積み残しになってしまうケースも多く見られた。これは、上級生が多くいる中で1回生の立場によるものであることが推察されるが、この点については、今後検討していきたい。

(4) 到達目標に対しての評価は、知識・思考、技能・表現について、満足できる成果を得られたと思える。しかし、意欲・態度においては、実習の後半部分で緊張感の低減や目的意識の減退が見られる学生がいた。

(5) 成績の評価は、全学生をまとめて行う、教室での講義・報告会・レポートによるものと、各教室での活動状況の合計点によって行った。各教室間の評価基準に若干の差があったと思える。

(6) 問題点として、各教室運営が独立しているため、開講時間・曜日・開講回数に大きな差があり、この条件の差に対して受講学生間に不満があることが明らかとなった。この点については、今後の課題として検討する必要がある。